『稲穂』と共に歩いて20年

牧内 雪彦（中47回・高1回）

『稲穂』が創刊20周年を迎えた。十年ひと昔風に言えば「ふた昔」だ。なるほど確かに世の中も人も大変わりしている。だが世の移り変わりは一口では言えない。

ところが人の変わり様は明らかで厳しい。生死を伴っているから動じがたく運命的だ。『稲穂』創刊号の奥付でみると編集委員16名のうち9名が今はすでに亡き人である。集まり散じ人は変わって創刊以来20年の今もまだ編集委員を続けているのはたった2名だけだ。

今春久しぶりに集合談話の編集会議が懐かしい四谷六番町の平田マンションで行われ、編集長から『稲穂』20周年第20号の企画など諮問があった。

いろいろご意見が出たけれど少しは記念号の色香をつけたいから「『稲穂』と私」という思い出ページを置くので執筆を願いますと申し渡された。

編集古参の生き残りだから覚悟はしたが、さて何を書くか考えていると懐かしい顔が次々と目に浮かび、やがて思い溢れて感情が乱れ纏（まと）めようがない。今川雅晴、林京平先輩、平田達、金田明夫、清水茂則、井伊健夫、宮淑子、西村清一、久保田郷二。

ああ、今は亡き編集同僚の顔ぶれの、それぞれを想い出していると、我が身も心も懐かしさに溺れて現世を離れ、時空の彼方へ消え入ってしまいそうになった。

＊

ならば面白く楽しい思い出を探せばいいじゃないか…

…すると一番に浮かんだのが『稲穂』編集会議後の飲食会から産声をあげて発足した「飯田ゆかりの地を歩こう会」だ。

遊び半分の軽い気持で始めた歩こう会だったが、なんとまあビックリ仰天の人気が出た。「年に1回じゃ待ち遠しいネ」の御意見も出て、さっそく春秋2回の開催で

●まきうち・ゆきひこ
昭和6年1月3日、養蚕農家の長男として川路村生れ。東京行きを大反対の祖父。4年後には必ず帰郷しますと本気で誓って祖父を安堵させた。結果は嘘になり、深い罪意識は高齢の今も心の底で疼いている。

実施が始まり、コロナ禍による集会禁止令?まで連続9年間18回の実績をもつ「飯田ゆかりの地を歩こう会」に成長したのだった。

この「歩こう会」は今思えば『稲穂』が生んだ大事業と云えるのじゃなかろうか。下見会は必ず会長同伴の4、5人で全コースを歩き、打上げ会場の予約と校歌合唱の許可まで確約するなど用意周到な下見会だった。

友達が友達を呼び飯田には関係のない女性の参加グループも常連になっていた。新婚ハネムーンベービーを乗せて乳母車を押し歩き参加で頬笑みの的になった榊原雅直君（高31回）、説明の声がよく届くようにと拡声器まで用意してくれた大原直君（高21回）など今も心温かく思い出す。

集合場所はJR駅前が多かったが、待ち合わせ時の気持ちの動きが何故かラブストーリーの雰囲気で思い出される。品川駅正面口、両国駅西口、秋葉原駅昭和通り口、目白駅、吉祥寺駅東口、上野駅公園口、駒込駅、千駄ヶ谷……。『稲穂』のお陰で僕は老いらくの恋心ムードを味わえたのだ。ありがとうね、飯田ゆかりの地を歩こう会の皆さんよ。

＊

今年の春、次のような案内葉書が届いた。

『カハル賞&2023福澤郁文作品展。3月18日（土）～21日（火）埼玉県川口市東本郷　カハルギャラリー』

添え書きには見馴れた彼の筆跡で「辺鄙な場所の画廊ですが、ご都合よかったらお出かけ下さい。19日のセレモニーに」

当日、倅の運転で画廊へ。川口市民になって久しいが知らない地域だ。探し当てた場所は画廊とは思えない中古家屋。入口に立つと「どうぞ」と逞しい髭ずら男が迎え入れてくれた。内部は意外にも広い展示場だ。見回すと男たちに囲まれて郁文君（高18回）がいた。だがもっと眼を惹いたのは華やかな民族サリー衣装で正装した美女たちの姿だった。『稲穂』の創刊号や在京同窓会の記念講演で福澤郁文君が語り読ませた国際協力活動。バングラデシュ復興奉仕で、蓄積された彼の美術作品展示と今年度の『カハル賞』授与式なのだ。

間もなく駐日大使が到着、挨拶そして表彰状授与、祝辞数人と続いて、ずうっとベンガル語で通訳無しだから小生うんざり。しかし郁文君は大使と並んで平然と耳を傾ける恰好をしている姿に感動した。

どんな場所でも度胸よく順応できる彼氏の才能に脱帽し、かっての『稲穂』編集委員の健在ぶりを紹介報告した次第である。